

増鏡

19 久米の佐良山

・ ・ ・

先帝は今日津の国昆陽野の宿と言ふ所に著かせ給ひて、夕づく夜ほのかにをかしきを、ながめ御座します。

命あればこやの軒ばの月も見つ又いかならん行末の空

昆陽野より出でさせ給ひて、武庫川・神崎・難波、住吉など過ぎさせ給ふとて、御心の内に思す筋あるべし。広田の宮の渡りにても、御輿止めて、拝み奉らせ給ふ。葦屋の里、雀の松原・布引の滝など御覧じやられるも、古き御幸共思し出でらる。生田の森をば訪はで過ぎさせ給ひぬめり。湊川の宿に著かせ給へるに、中務の宮は、こやの宿に御座します程、間近く聞き奉らせ給ふも、いみじうあはれに悲し。宮、

いとせめてうき人遣りの道ながら同じとまりと聞くぞ嬉しき

福原の島より、宮は御舟に奉る。御門は、和田の岬・刈藻川をうち渡して、須磨の関にかからせ給ふ。彼の行平の中納言、「関吹きこゆる」と言ひけんは、浦よりをちなるべし。あはれに御覧じ渡さる。源氏の大將の、「泣く音にまがふ」と宣ひけん浦波、今もげに御袖にかかる心地するも、様々御涙の催し也。播磨の国へ著かせ給ひて、塩屋・垂水と言ふ所をかしきを、問はせ給へば、「さなん」と奏するに、「名を聞くよりからき道にこそ」と宣はせて、差しのぞかせ給へる御様かたち、ふり難くなまめかし。けちかき限りは、あはれにめでたうもと思ひ聞こゆべし。

大倉谷と言ふ所少し過ぐる程にぞ、人丸の塚は有りける。明石の浦を過ぎさせ給ふに、「島がくれ行く舟」共、ほのかに見えてあはれ也。

水の泡の消てうき世を渡る身の羨ましきは海士の釣舟

野中の清水・ふたみの浦・高砂の松など、名ある所々御覧じ渡さるるも、かからぬ御幸ならば、をかしようも有りぬべけれど、万かき暗す御乱り心地に、御目とまらぬも、我ながらいとう屈じにけるかなと思さる。いと高き山の峰に、花面白く咲き続き、白雲をわけ行く心地するも艶なるに、都の事数々思し出でらる。

花は猶うき世もわかず咲きてけり都も今や盛りなるらむ

あと見ゆる道のしをりの桜花此の山人の情けをぞ知る

## 247 小清水合戦事付瑞夢事

去程に其日の暮程に、摂津国の守護赤松信濃守範資、使者を以て申けるは、「八幡より石堂中務大輔・畠山阿波守国清・上杉蔵人大夫を大将にて、七千余騎を光明寺の後攻の為にとて、被差下也。前には光明寺の城堅く守て、後に荒手の大敵懸りなば、ゆゝしき御大事にて候べし。只先其城をば闇れ候て、討手の下向を相支へ、神尾・十林寺・小清水の辺にて御合戦候はゞ、敵の敗北非疑處。御方一戦に利を得ば、敵所々に軍すと云ふ共、いつまでか忪へ候べき。是只一挙に戦を決して、万方に勝事を計る處にて候べし。」と、追々早馬を打せて、一日に三度までこそ申されけれ。將軍を始奉て師直・師泰に至るまで、げにも聞ゆる如ならば、敵は小勢也。御方は是に十倍せり。岨しき山の城を責ればこそ叶はね、平場に懸合て勝負を決せんに、御方不勝と云事不可有。さらば此城を闇て、先向なる敵に懸れとて、二月十三日、將軍も執事兄弟も、光明寺の麓を御立有て兵庫湊川へ馳向はる。畠山阿波守国清は、三千余騎にて播磨の東条に有けるが、此事を聞て、さては何くにてもあれ、執事兄弟のあらんずる所へこそ向めとて、湯山を南へ打越て、打出の北なる小山に陣をとる。光明寺に楯籠つる石堂右馬頭・上杉左馬助も光明寺をば打捨て皆畠山が陣へ馳加る。同十七日夜、將軍執事の勢二万余騎御影浜に押寄、追手搦手二手に分らる。「軍は追手より始て戦半ならん時、搦手の浜の南より押寄て、敵を中に取籠よ。」と被下知ける。薬師寺次郎左衛門公義は、今度の戦如何様大勢を憑て御方為損じぬと思ひければ、弥吾大事と気を勵しけるにや、自余の勢に紛れじと、絹三幅を長さ五尺に縫合せて、両方に赤き手を著たる旗をぞ差たりける。一族の手勢二百余騎雀松原の木陰に控て、追手の軍今や始まると待處に、兼ての相図なれば、河津左衛門氏明・高橋中務英光、大旗一揆の六千余騎、畠山が陣へ押寄て時を作る。畠山が兵静り返て、態と時の声をも不合、此の藪陰、被この木陰に立隠て、差攻引攻散々に射けるに、面に立つ寄手数百人、馬より真倒に射落されければ、後陣はひき足に成て不進得。河津左衛門是を見て、「矢軍許にては叶まじきぞ、抜て蒐れ。」と下知して、弓をば藪へからりと投棄て、三尺七寸の太刀を抜て、敵の群りたる中へ会尺もなく懸入んと、一段高き岸の上へ懸上げる處に、十方より鎌を汰て射ける矢に、馬の平頸草わき、弓手の小かいな、右の膝口、四所まで篋深に射られて、馬は小ひざら折てどうと臥す。乗手は朱に成て下立たり。是を見て畠山が二百余騎喚て蒐りければ、跡に控たる寄手の大勢共荒手を入替て戦はんともせず、手負を助けん共せず。鞭に鎧を合て一度にはつとぞ引たりける。石堂右馬頭が陣は、是より十余町を隔てたれば、未御方の打勝たるをも不知、「打出の浜に旗の三流見へたるは、敵か御方か見て帰れ。」と云れければ、原三郎左衛門義実只一騎、馳向て是を見に、三幅の小旗に赤き手を両方に著たり。さては敵也と見課て馳帰けるが、徒に馬の足を疲かさじとや思けん、扇を挙て御方の勢をさし招き、「浜の南に磬へたる勢は敵にて候ぞ。而も追手の軍は御方打勝たりと見へ候。早懸らせ給へ。」と、声を挙てぞ呼びける。元より気早なる石堂・上杉の兵共是を聞て何かは少しも可思惟。七百余騎の兵共、馬の轡を並べて喚て懸けるに、薬師寺が迹に扣たる執事兄弟の大勢共、未矢の一をも不被射懸、捨鞭を打てぞ逃たりける。梶原孫六・同弾正忠二人は追手の勢の中に有て、心ならず御方に被引立六七町落たりけるが、後代の名をや恥たりけん、只二騎引返して大勢の中へ懸入る。暫が程は二人一所にて戦けるが、後には別々に成て、只命を限りとぞ戦ける。孫六は敵三騎切て落して、裏へつと懸抜たるに、続く御方もなく、又見とがむる敵も無りければ、紛れて助からんよと思て、笠符を取て袖の下に収め、西宮へ打通て、夜に入れば、小船に乗て將軍の陣へぞ参りける。弾正忠は偏に敵に紛れもせず、懸入ては戦ひ戦ひ、七八度まで馬烟を立て戦けるが、藤田小次郎と猪股弾正左衛門と、二騎に被取籠討れにけり。後に、「あはれ剛の者や、誰と云者やらん。名字を知ばや。」とて是を見

るに、梅花を一枝折て箆の上に著たり。さては元暦の古、一谷の合戦に、二度の懸して名を揚し梶原平三景時が、其末にてぞ有らんと、名のらで名をぞ被知ける。薬師寺二郎左衛門公義は御方の追手搦手二万余騎、崩れ懸て引共少も不騒、二百五十騎の勢にて、石堂・上杉が七百余騎の勢を山際までまくり付て、続く御方を待処に、一騎も扣たる兵なければ、又浪打際に扣て居たるに、石堂・畠山が大勢共、「手著たる旗は薬師寺と見るぞ、一人も余すな。」とて追懸たり。公義が二百五十騎、敵後に近付ば、一度に馬を屹と引返して戦ひ、敵先を遮れば、一同にわつと喚て懸破り、打出浜の東より御景浜の松原まで、十六度迄返して戦けるに、或は討れ或は敵に被懸散、一所に控たる勢としては、弾正左衛門義冬・勘解由左衛門義治、已上六騎に成にけり。兵共暫馬の息を継せて傍を屹と見たるに、輪違の笠符著たる武者一騎、馬を白砂に馳通して、敵七騎に被取箆たり。弾正左衛門義冬是を見て、「是は松田左近将監と覚る。目前にて討るゝ御方を不助云事やあるべき。」とて、六騎抜連て懸れば、七騎の敵引退て松田は命を助てげり。松田・薬師寺七騎に成て暫し扣たる処、彼等手の者共彼方より馳付て、又百騎許に成ければ、石堂・畠山先懸して兵を三町許追返したるに、敵も勇氣や疲れけん、其後よりは不追ければ、軍は此にて止にけり。薬師寺は鎧に立処の矢少し折懸て湊川へ馳帰たれば、敵の旗をだにも不見して引返しつる二万余騎の兵共、勇氣を失、落方を求て、只泥に酔たる魚の小水にいきづくに異らず。さても合戦をつら／＼案ずるに、勢の多少兵の勝劣、天地各別なり。何事にか是程に無念可打負。是非直事と思ふに合て、其前の夜、武蔵五郎・河津左衛門と、少も不替二人見たりける夢こそ不思議なれ。所は何く共不知渺々たる平野に、西には師直・師泰以下、高家の一族其郎従数万騎打集て、轡を双て控たる。東には錦小路禅門・石堂・畠山・上杉民部大輔、千余騎にて相向ふ。両陣鬨を合せて、其戦未半時、石堂・畠山が勢旗を巻て引退く。師直・師泰勝に乗て追蒐る処に、雲の上より錦の旗一流差挙て、勢の程百騎許懸出たり。左右に分れたる大将を誰ぞと見れば、左は吉野の金剛蔵王権現、頭に角生て八の足ある馬に被召たり。小守勝手の明神、金の鎧に鉄の楯を引側めて、馬の前後に順ひ給ふ。右は天王寺の聖徳太子、甲斐の黒駒に白鞍置て被召たり。蘇我馬子大臣甲冑を帯し、妹子大臣・跡見の赤袴・秦河勝、弓箭を取て真前に進む。師直・師泰以下の旗共、太子の御勢を小勢と見て、中に箆て討んとするに、金剛蔵王御目をいらゝげて、「あれ射て落せ。」と下知し給へば、小守・勝手・赤袴・河勝、四方に颯と走りけり。同時に引て放つ矢、師直・師泰・武蔵五郎・越後将監が眉間の真中を徹て、馬より倒に地を響して落ると見て、夢は則醒にけり。朝に此夢を語て、今日の軍如何あらんずらんと危ぶみけるが、果して軍に打負ぬ。此後とても、角ては憑しくも不思議と、聞人心に思ぬはなし。此夢の記録吉野の寺僧所持して、其隠なき事也。